

FM バックキャスト研修 ASU 報告  
東北大学病院 栄養管理室



未来型医療卓越大学院プログラム

第6期生、5期生 Aグループ

### ①授業前の知識

今回、初めて栄養管理室で実習をさせていただく機会を得た。Aグループのメンバーのバックグラウンドとしては、医学系研究科1人、生命科学研究科1人、社会学研究科1人であり、医学系研究科のメンバーも栄養管理室の具体的な仕事内容の知識は持ち合わせていなかった。

バイオデザイン手法に関する事前知識や経験は全メンバーとも持ち合わせておらず、事前配布のテキスト『デザイン思考と医療機器イノベーション』(中尾・八木、2023)から知識を得て臨んだ。

### ②授業の目的

日本が抱える働き手、納税者が激減していく中で高齢者を含め医療資源が大きく増加する「Huge Mismatch」を解決する手法としてのバイオデザイン思考を、実際の医療現場での実習を通して、医療従事者や患者に共感し、アンメットニーズを深掘りし、ニーズステートメントを作成するという一連の過程で学び、習得すること。

### ③到達目標

臨床現場観察や医療者へのインタビューを通して、現場医療者の共感が得られる「ペイン」を抽出し、Aグループが重視する社会的・経済的インパクトが大きいニーズステートメントを設定できるようになること。

### ④授業内容

#### 6月24日(月)：マインドセット・困りごとの言語化

- Opening lecture (中川敦寛先生)：日本の社会問題である「huge mismatch」を解決するためにデザイン思考を学ぶ意義に関して講義を受けた。
- 小鯖先生よりデザイン思考に関するレクチャーがあり、まず自己紹介を通じて研修生の自己理解/他者理解を行いAグループの強み・弱みを共有した。その後戦略的フォーカスを設定し、臨床ニーズを抽出する方法やインタビューの仕方を学び実際に栄養管理室での現場観察を通じて困りごとを100個程度抽出した。

#### 6月25日(火)：影響の言語化と課題と深掘り

- 現場観察を通じての困りごとの抽出を続けながら、問題の識別と戦略的フォーカスに基づいて点数付けを行い、10個程度に課題ステートメントの絞り込みを行った。

#### 6月26日(水)：課題の選択

- 絞り込んだ課題ステートメントに関して、Insightを探るために課題の深掘りを行い課題に対する仮説をたてた上で、実際に現場の方へのインタビューに臨んだ。

#### 6月27日(木)：課題の明確化、ニーズステートメントの作成

- 医療者の実際の「pain」に共感できた課題ステートメント2つに絞り、メカニズムの考察やステークホルダー分析、市場分析などの調査を進め、解決すべき本質的課題を特定した。
- ビジネスメンタリング（島田明恵先生）：自身の経験をもとに、課題解決に向けてのビジネスモデルでのニーズの特定や事業展開に関する実際の話（コア・コンピタンスの重要性など）を伺った。

#### 6月28日(金)：成果報告/プロセスの振り返り

- 本質的課題に対するメカニズムの考察を進めるとともに、発表準備、成果報告を行った。発表したニーズステートメントは以下の通りである。
1. 入院食を提供する管理栄養室にとって Food loss を削減するために予備食を数日間保存する方法
  2. 肥満により栄養指導が必要とする患者にとって、良い習慣を導く成功率を高めるために二回の指導の間の生活習慣を可視化させて分析する方法

#### **⑤研究や仕事などに活かせる点**

A：バイオデザイン思考のニーズスコーピングは、実際の研究テーマの設定にも応用できる考えであり、常に課題の深掘りを行い根源的な部分における課題解決を行なっていくことが重要であると学んだ。

B：治療の効果を長期的に維持するためには、医療者と患者の両方のニーズを考慮する必要があると学んだ。これまでは患者視点の研究を行ってきたが、医療者のニーズも重要であると気づいた。今後は医療者へのインタビュー調査も研究の一部にするつもりだ。

C：課題の探索、抽出、およびそれらの明確化、そして課題に対するニーズステートメントの作成について学びましたが、普段の研究でも多くの課題や問題が発生しており、これらを解決するためのアプローチの方法はどのような研究や仕事にも適用できると考えています。

#### **⑥影響を受けたこと**

A：バイオデザイン思考は、感性と論理性のバランスから成り立っており、普段の研究においては論理的な部分を重視していたため、現場の pain に「共感」してニーズを抽出する手法が新鮮に感じた。

B：母国の文脈ではあまり見られない医療制度について学び、新しい視点を得た。今後も異なる文化の考え方をより深く理解し続け、より広い範囲で適用できる研究成果を出すつもりだ。

C：デザイン思考では、「なぜ」「何が」「いつ」「誰が」という問いを常に考えます。私

自身、日常生活において、周りの事象に対してこのような思考を持つことはあまりなく、解決策から考えてしまう傾向がありました。そのため、問題がなぜ、どのような経緯で発生するのかをデザイン思考に基づいて深く掘り下げる必要性を強く感じました。

#### ⑦来年度以降の改善点

A：5 日間でバイオデザイン思考の考え方から実際のニーズステートメントの作成までを体験することができる凝縮されたプログラムで、内容的に非常に充実していたため特に改善点は見当たらなかった。

B：現場の観察を二人一組で行うことで、異なる視点からの結論が得られる可能性がある。これにより、観察結果の精度が向上すると思う。

C：今回は栄養管理室の課題解決に取り組むにあたり、栄養管理室の方々からお話を伺う機会を多くいただきました。栄養管理室に存在する課題は、栄養管理室だけの問題ではなく、さまざまな人々が関与する課題であることが多いため、関係者にも質問する機会があるとよいと感じました。

#### ⑧授業の限界

A：医療者の pain に触れる機会があったが、実際の患者さんの pain に関して生の声を聞くことができず、想像・仮説にとどまったこと。

B：栄養相談の現場だけを見たため、患者の生活実態を全面的に把握できなかった。機会があれば、患者の栄養相談に対する感想を直接聞くことが必要だと思う。患者の生活全体を理解することで、より効果的な支援策を提案できるようになる。

C：今回の授業ではニーズステートメントの設定までで終了したが、どのように今後に活かすかや何をすればよいかを考え実施することができなかったこと。

#### ⑨まとめ

東北大学病院の栄養管理室で5日間、バイオデザイン思考を学ぶバックキャスト研修を行い、バックグラウンドの違う3名の研修生での共同作業を通じて様々な視点から医療現場のニーズを抽出し、ニーズステートメントの作成、そして実際の solution まで考え、実践することができた充実した研修であった。バイオデザイン思考は社会課題の解決に対して非常に有用な思考法であるので、今後も学んだことを生かして応用していきたい。